

〔研究ノート〕

ヴェルボトナル法の発展と受容に関する若干の考察

城 哲 哉

名古屋学院大学経済学部

要 旨

ある特定の言語教授法が指導のメソッドとして採用されるかどうかは、指導者個人の判断や教授法への信頼だけでなく、その時代の社会的要請や教育界の動きなど、外的な要因や条件に左右されることが知られている。本稿では、ペタル・グベリナによって創案されたヴェルボトナル法の発展やその受容の歴史を振り返りながら、この教授法が持つ意義や特性について再考する。

キーワード：言語教授法の受容性，ペタル・グベリナ，ヴェルボトナル法，音声教育

Adoption of the verbotonal method as a teaching method: Its history and some issues

Tetsuya JO

Faculty of Economics
Nagoya Gakuin University

1. はじめに

ヴェルボトナル法の創始者であるペタル・グベリナ (Petar Guberina) が言語教育において最も重視したものは、話し言葉によるコミュニケーション能力の育成にあった。習得を目指すものが生きた言葉である以上、これは当然期待されうる目標と言える。しかしながら、同様のことが声高に叫ばれる割には、日本の英語教育の実態を見ると未だに音声面への配慮に欠け、具体的な指導案の提示もなされていない状態にある。望みたくないことであるが、多くの教育の現場では、音声指導そのものが意図的に棚上げされ、教授の対象から外れている可能性さえある。ヴェルボトナル法による言語教育は、外国語教育の分野では全体視聴覚構造方式 (SGAV) の名のもとに、60年代初頭から70年代にかけて欧州を中心に盛んに用いられ、また聴覚障害児のリハビリにおいては、今日に至るまで世界中の多くの施設でこの方法論を用いた教育が行われ、著しい成果を上げている。一方、この方法論の日本での普及状況を見ると、いくつかの教育機関でフランス語や日本語教育に関して組織的な取り組みが行われているが、聴覚障害のリハビリを行う施設としては、関東学園ヴェルボトナル研究所が国内唯一の機関となっている¹⁾。海外に比べて、残念ながらその知名度が日本ではまだ十分に行き渡っていない。グベリナの祖国クロアチアでは、氏の死後もヴェルボトナル法の研究拠点であるスヴァグ・ポリクリニカ (SUVAG Poliklinika) やザグレブ大学音声学科にて、今も活発な活動が続けられている。しかし、グベリナ亡き後、ヴェルボトナル法の進展に寄与した研究者の老齢化も進んでおり、今後どのような形でグベリナが精神が継承、維持されるかは不明である。ただ幸いなことに、ヴェルボトナル法の原理や初期段階 (1960年代) から取り入れられた様々な指導技術の中には、最近の研究によって再評価され始めたものも出ており、グベリナの先見性について今後議論が活発化することが期待される。また、これまで一般ではなかなか入手困難であったグベリナの重要論文を一巻に纏めた書籍が、ヨーロッパや日本で出版され、半世紀にわたる思索の跡や教育実践を知ることができるようになった²⁾。また音声教育への関心は昨今年々高まっており、応用言語学における独立した領域として発音教育が認知され、国際会議も度々開催されることに加え、専門のジャーナルも出版されるようになった³⁾。このような時代であるからこそ、グベリナの音声言語観や言語教育観を見つめ直し、ヴェルボトナル法の意義や価値を再確認する作業は有益であると考えられる。グベリナが半世紀以上にわたって展開した主張は、現代の音声指導の在り方を論ずる際にも有意義な示唆を与え、決して過去のものではないからである。

そのようなグベリナの貢献を振り返るあたり、何故ヴェルボトナル法という教授法が日本の言語教育の場で定着しづらかったのか、その受容性の問題点に本稿では注目してみたい。日本の英語教育においてオーラル・コミュニケーション能力の向上が期待されながらも、なかなか実が見られないというジレンマは、日本の言語教育の捉え方とグベリナの言語観との相違に、その幾ばくかの原因が反映されているように思えるからである。教授法の選択というよりは、基本的な教育観の違いと言ったほうが適切であるかもしれない。ここでは、ヴェルボトナル法を例に取りながら、どのような外的な条件や要因が受容性に関わりを持ったのかを問うてみたい。以下、受容

性を論ずる前にヴェルボトナル法の成立に関わるグベリナの学問的な背景について簡単に紹介する。

2. グベリナの学問的背景と生きた時代

グベリナがヴェルボトナル法の発展に努めた20世紀後半は、欧米の言語、音声研究が最も華やいだ時代であり、グベリナ自身もパリ留学によって、当時隆盛を極めていたソシユール言語学、ピアジェ学派の派生認識論に触れることになる。ラングからパロールへ、つまり話し言葉に深い関心を抱き、パリ大学に提出された博士論文は複合文におけるイントネーション構造を扱ったものであった⁴⁾。これは、ヴェルボトナル法発展の礎とも言える著作として知られる。パリ遊学後のグベリナ理論の発展を学説史の中に定置する作業が今後待たれるところであるが、ヴェルボトナル法の確立には、グベリナの持つ学問の時流に束縛されず、自由な発想を展開する秀逸な頭脳に加え、彼が母国ユーゴスラビアで置かれた立場からの影響を探る作業は必須である。グベリナ思想の理解、ヴェルボトナル法の確立を知る手がかりを、彼の著作物だけから探るには限界がある。彼が生きた時代、母国で任された任務、交流した人々等、多方面からのアプローチが求められ、それ無しにヴェルボトナル法の成立過程を知るは無理であるように思われる。残念ながら、このような作業はザグレブでも始まっておらず、ここでも断面的な情報の紹介に留めざるをえない。

ヴェルボトナル法が外国語教育の分野で脚光を浴びるのは50年代のことであり、フランス政府が旧アフリカ植民地からの移民に対するフランス語教育を国家プロジェクトとして立ち上げ、最初に作成された視聴覚教材*Voix et Images de France*の開発にグベリナが招聘されたことに始まる。発音、聞き取り、感受性の役割などの分野で教材作成の中心を担ったことで、ヴェルボトナル法（当時はSGAVという名称で知られていた）の知名度は一挙に上がることとなった。フランス留学時代の交流を通して多くの知己を得、学問的にもヨーロッパの檜舞台に進出することになるが、元々政治に関心を抱き、ユーゴスラビア建国の父であるチトーと伴に地下に潜伏していた時代があったと聞く。戦後、外交官としてスイスやギリシャに赴き、一時期国連本部に駐在した時代もあるなど、その政治的手腕は高く、政治との関わりは終生続き、2005年に亡くなった時もポルトガル名誉領事の職にあった。90年代初頭の内戦の際には、溢れた難民の子供たちの援助に深く関わっていたことも知られている。国内初の音声学研究室のザグレブ大学での設置、クロアチアにおける聴覚障害児のリハビリ拠点であるスヴァグ・センター（現スヴァグ・ポリクリニカ）の設立等、自己の理想を次々と実現する手腕は、並の学者の力量を超えており、ヴェルボトナル法の成功の裏にグベリナの並外れた行動力があったことは忘れてはならない。グベリナの関心が時代とともに外国語教育、言語・聴覚障害のリハビリテーションへと拡がり、最終的にはスヴァグ・ポリクリニカとして現在知られる、病院・教育機関・リハビリ施設を統合する国最大の施設にまで発展する⁵⁾。活動領域を拡張する彼に大学内での研究活動に専念するよう進言した者もいたようであるが、グベリナはそれを聞き入れず、信念を突き通したとも聞く⁶⁾。

では、彼のこのような学問への態度はどこから生まれたのであろうか。ここでは3つのことを指摘したい。まずは学問に対する一貫した姿勢である。グベリナの研究の流れを追うと気づくことであるが、時代ごとの学問の潮流に乗ることなく、思想に揺らぎがないことである。これはヨーロッパの伝統の中に身を置いたことが幸いしたと言えるかもしれないが、北米を中心に展開した理論言語学の流れや当時流行した言語教授法に影響を受けることはなかった。例えば音声の指導における単音から始まり、徐々に単位を上げ、最終的に文を構成させる構造主義的なアプローチ、またパターン・プラクティスに代表される単純な文の繰り返しでは、本当の意味でのコミュニケーション能力が養成できないことを明確に述べ、真向から反対している。また戦後アメリカで開発が進んだ音響分析技術に触れながらも（グベリナはニューヨークの国連代表部時代に、当時国連本部の目と鼻の先にあった世界最先端のハスキンス研究所の研究グループと接触を持っていたことが知られている）、音声の機械的処理（視覚表示）だけでは生成の一面を捉えているに過ぎず、脳内における音の処理や意味理解は到底解明できないということに早々と気づいていた。漠然と音を聞くだけでは、脳内処理は行われぬこと、あるいは聴覚障害児に大きな音を聞かせるだけでは痛みにしかならないこと等、いかなる介入が脳内処理を活性化させるベストな方法であるかを、グベリナはその時代に既に模索を始めていたとされる。2つ目は、ヴェルボトナル法の中核概念とも言える「最適性」への信奉である。教育、リハビリにおいて決まったルーティンを極力排して、個々の能力、成長度、状況、教材の選択、訓練方法等、最適な選択を実行することを目標としており、個に寄り添うこと、方法論の柔軟性を重視する。3つ目は、人間の可能性への限りのない信頼である。脳の可塑性については、最近になって多くの発見が報告されるようになったが、グベリナは半世紀も前から、聴覚障害者であっても皮膚感覚や振動等の別の経路を通して、脳が音の処理を可能とすることを主張してきた⁷⁾。自己の研究を進めるとともに、その教育現場への応用を模索し、それを実現するための施設の設立を実行したグベリナは、現代風に言えば総合的プロデューサーとしての役割も演じたと言える。

3. ヴェルボトナル法の受容性

ある特定の指導法を言語教育に取り入れるかどうか、つまり受容性の問題は、指導者自身の判断や教授法への信頼だけで決まるのではなく、外的な要因、条件にも左右される。リチャーズ&ロジャーズ（2007）は、20世紀の主要な言語教授法の隆盛や衰退を分析し、教授法の選択や言語教育の動向に影響を及ぼす9つの要因を紹介している。表1は、彼らが指摘した内容（pp. 311-13）を一部要旨が伝わりやすいように改変し、表の形でまとめたものである。

他の教授法と同様に、ヴェルボトナル法も時代の波から逃れることはできず、様々な影響を受けて今日に至っている。本節では、受け入れる側の日本の状況などを踏まえつつ、ヴェルボトナル法の形成や受容にどのような要因が働いたかを、下の表の（a）から（i）の項目ごとに順番に見て行きたい。尚、ヴェルボトナル法はその発展段階で、言語聴覚障害を扱う分野をヴェルボトナル法、外国語教授教育を扱う分野をSGAVと分けて呼ばれた時期もあり、現代でもその区分を

表1 言語教育の動向に影響を及ぼす要因

影響要因	内 容
(a) 政府方針による指示	国の主導によるトップダウンの教育改革
(b) 教育界における動き	特定の教育手法やアプローチの推奨
(c) 有力な指導者による改革	独自の思想を持ち、支持者を集める強力な指導者の影響
(d) テクノロジーへの対応	ICTなどが指導内容、指導形式に及ぼす影響
(e) アカデミックな分野からの影響	特定のアプローチを支持する学習理論の影響
(f) 研究の影響	第二言語習得の理論に基づく言語教授法の開発
(g) 学習者中心の改革	教師主導から学習者を中心とする教育へのシフト
(h) 教育界の動きとの交差	協同学習など、他教科の教育手法との同調
(i) 他分野との交差	認知心理学や人間工学など他分野からの影響

原典：リチャーズ&ロジャーズ（2007）を一部改変

名称に反映させることも多い。本来ならば、その両分野を包括するヴェルボトナル・システムあるいはヴェルボトナル理論という呼び方が相応しいであろうが、あえて分ける必要がない限りは、以下でもヴェルボトナル法と呼ぶことにする⁸⁾。

(a) 政府方針による指示

政府主導の言語教育プログラムとしては、米国で第2次世界大戦末期に「陸軍特殊訓練計画」の中で進められた集中言語学習プログラム（Army Method）や、ソ連との冷戦時代を迎えた50年代に「国家防衛教育法」の一環として開発が進められたオーディオリンガル・メソッド（Audiolingual Method）が有名である。ヴェルボトナル法も前述したように、フランス政府移民政策の一端を担う形で50年代に進められた国主導のフランス語教育の教材開発に深く関与することになり、グベリナは教材開発のリーダーであったポール・リヴァンク（Paul Rivenc）と共にSGAV開発の中心人物としてその名を残すことになった。最初の教材*Voix et Images de France*が1969年までフランス政府公認の唯一の教材であったこともあり、フランス語教育の世界ではSGAVの影響がその後も続くことになるが、他言語においてはコミュニカティブ・アプローチの台頭などもあり、その人気は80年を境に徐々に衰退して行く。SGAVに基づく教材開発はその後途絶えていたが、80年代後半に新しい教材開発の機運が再びザグレブにて起こり、政府からの財政援助も決まっていたが、ユーゴスラビア内戦の開始によりその計画は実現されることなく頓挫してしまった⁹⁾。

(b) 教育界における動き

特定の教育手法やアプローチが台頭し、他の指導法に取って代わることは言語教育の世界では頻繁に起こりうる現象である。リチャーズ&ロジャーズ(2007)は言語教授法の変遷史を総括し、

「過去100年間の言語教育史とは第2言語または外国語の、より効果的な指導法の探求であったと言える。『言語教育の問題』に対する最も一般的な解決策は、新しいアプローチやメソッドの採用にあると考えられてきた」(p. 301)と述べている。つまり言語教授法の歴史は、常に新しいメソッドの追求そのものであり、「理解や使用が難しい、実際の応用の仕方が明らかではない、特別な訓練を要する、教師の指導方法や信念に大きな変更が求められる」(p. 304)など理由をつけながら、人々がメソッドを次々に乗り替えた100年の歴史であったと主張している。更に彼らによると、20世紀末には教授法に対する信頼は失われ始め、言語教育の成否はメソッドの選択ではないという考え方が主流を占めるようになった。このような現代の状況を彼らは、「メソッドとアプローチの死」あるいは「ポスト教授法時代」と呼んでいる。

例えばこのようにつらい易い教授法乗り換えの事例として、Howatt (1984)はヴェルボトナル法に言及している。彼によれば、60年代にイギリスで人気を博していたテキスト *First Things First* には、言語構造を教える漫画がふんだんに盛り込まれ、ヴェルボトナル法で使用される視聴覚教材に似ていたため、ヨーロッパで好評を博していたヴェルボトナル法への移行は十分可能であった。しかしチョムスキーによる構造主義や行動主義への批判が言語教育界にも影響を及ぼし始めると、構造という名前を持つSGAVへ懐疑の目が向けられ、時を同じくして台頭する言語の機能面を重視するコミュニカティブ言語教授法へ関心が高まるようになる。結局ヴェルボトナル法がイギリスで受容・利用されることはなく、そのチャンスを失うことになってしまった。

日本へのヴェルボトナル法の本格的な紹介は、70年代に上智大学のクロード・ロベルジュによって始められ、特に聴覚障害児への教育は77年に大学内の聴覚言語障害センターにてスタートすることになる。しかし、聴覚障害児への指導方法の選択には、外国語教授法とは異なる一筋縄では行かない厄介な問題が存在する。本稿の冒頭で述べたように、ヴェルボトナル法が言語教育において最も優先するのは、聴覚障害児に対しても話し言葉の習得である。長らく日本においては、これらの子供たちへの教育には音声言語を重視する口話法が採られ、教室内での手話の利用はほぼ禁止の状態が続いていた。しかしながら1989年に聴覚障害児の保護者や聴覚障害を持つ当事者の団体などから、口話法一辺倒の見直しと手話の使用を認める運動が始まり、当時の文部省は1993年に中等部・高等部に限って手話の使用を容認する方向へ舵を取る。更に2000年には小学部の保護者団体から、手話による教育を受けられないことは学習権、平等権の侵害であるという人権救済の申し出が日本弁護士連合会に出された後、文科省も手話を使った聾教育を行うことについて法的制約は何もないとの方針を出しており、現代では口話法から手話へ大きく様変わりしている¹⁰⁾。90年代の終わりには、ロベルジュの退職と時を同じくして、上智大学聴覚言語障害センターにおけるヴェルボトナル法による聴覚障害児教育は、その役割を終えることになる。指導法の善し悪しとは別に、教授法の受容には明らかに社会的な情勢が影響を与える典型的な例であると考えられる。

(c) 有力な指導者による改革

有力な指導者のリーダーシップや弟子育成により教授法が広く受け入れられた例として、70

年代や80年代に注目を受けたサイレント・ウェイのカレブ・ガターニョ (Caleb Gattegno), サジェストペディアのゲオルギー・ロザノフ (Georgi Lozanov), ナチュラル・アプローチのスティーヴン・クラッシュン (Stephen Krashen) などの著名な言語教育者や応用言語学者の名前が浮かぶ。ヴェルボトナル法も例外ではなく、グベリナの強力な指導力無くしてはこの方法論が世界に広がることはなかったと思われる。グベリナがザグレブ大学音声学科の教授を務めながら、スヴァグ・ポリクリニカという医学、臨床心理、教育学、医療工学、音声学、舞踊等の専門家を擁し、言語聴覚障害を扱う国内最大規模を誇る研究教育施設を、大学の外に（現在はザグレブ市管轄の公的機関）作り上げたことにただ驚かざるを得ない。もちろんこの施設内には外国語教育部門も置かれ、SGAVに基づく指導が行われており、クロアチア共和国の話し言葉研究の拠点となっている。

強力な個人のリーダーではないが、グループとして教育手法の導入に影響を及ぼした例としては、戦後ガリオア資金（後のフルブライト奨学基金）によって米国に渡った日本の英語教員の存在がある。この資金は、1949-51年の3年間に1,000名を超える日本人に米国での勉学の機会を与える壮大なプロジェクトであったが、選抜された現職英語教員の多くが、当時オーラル・アプローチ (Aural-Oral Approach) のメッカであったミシガン大学で学んだことが知られている。当時ミシガンには、アメリカ応用言語学界を代表するチャールズ・フリーズ (Charles C. Fries) やロバート・ラド (Robert Lado) がおり、彼らの薫陶を受けた教員が帰国後、パターン・プラクティスなどの指導法を日本各地で広めることになる。3年の短い実施ではあるものの、ガリオア資金による英語教員の派遣が、その後の日本における英語指導の在り方に重要な影響を及ぼすプロジェクトであったことは間違いない。

(d) テクノロジーへの対応

テクノロジーへの対応という意味では、特に外国語教育に限ると、ヴェルボトナル法は技術革新の波をさほど受けることはなかったと言える。その証左として、SGAVで用いるフィルムに焼き付けられた静止画像（絵）は、映写機でホワイト・ボードや壁に映すことで用は足りており、逆にコンピュータやマルチメディア機器などを使って学習者に動画像を見せることは、初級学習者に意味と絵の関係を見失わせてしまい、逆に弊害を生む可能性もある¹¹⁾。ヴェルボトナル法は、学習の在り方として、人間と人間の情緒的ふれ合いや、体の中に学習者が感じる自己受容性を重視する方法であるので機器へ依存することはない。従って、母音の指導においても、フォルマント解析の結果に基づきコンピュータの画面上にその結果を示し、調音点異同を示すような明示的指導は行わない。もちろん聴き取りの向上のために、電子フィルター機器SUVAGやVERBOTONまたそれに付随する振動器を使用することもあるが、50年代に1号機が完成して以来その基本原理は変わっておらず、変更されたのは当初真空管であった部分がデジタル化されただけである。

(e) アカデミックな分野からの影響

グベリナ思想形成には、パリ大学で薫陶を受けた著名な言語学者、心理学者、社会学者に加

えて、戦後外交官としてスイスに赴任中に、短い時間ではあるが交流を深めることになるソーシャルの後継者シャルル・バイイ (Charles Bally) の影響が大きいことが知られている。グベリナは既に博士論文の中で、話し言葉の文体論をテーマとしており、ソーシャルによって定義付けられた「パロール」(parole) 概念の不備を指摘している。グベリナは、ソーシャルのパロールの定義付けでは人間の豊かな言語活動が説明できないことを述べ、後にヴェルボトナル法の重要概念となる「話し言葉の価値体系」(Valeurs de la langue parlée) という用語を論文で用いている。これはソーシャルのパロールには含まれない非言語的手段、つまりリズムやイントネーションなどのプロソディに加えて、緊張度、身振り、姿勢、話者空間、状況、文脈、社会環境、心理的側面、話者の感情などを指すものであった。このグベリナによるパロール概念の見直しは、ソーシャルの弟子でありながら、言語の習慣的対立とは異なる感情のパロールを重んじるバイイとは相通じるものがあった。

更にヴェルボトナル法の形成に影響を与えたものとして、第2次世界大戦前に流行したゲシュタルト心理学の「不連続性」の考え方がある。この理論によれば、脳は提示された情報のすべてを受け入れるのではなく、ふるいにかけて選別し、最適なもののみを取り入れる。例えば、音声聴取において、すべての周波数帯域が必要ではなく、ある限られた周波数帯域のみを選別して脳が処理していることが知られている。グベリナが開発した電子フィルター機器SUVAGを利用して確認することが可能で、[i]という母音を録音し、様々な異なる周波数帯域を通して聴取すると、違った母音に聞こえるくる。また音声の聴取に重要な周波数帯域と言われる300～3,000Hzを除去し、両サイドの0～300Hzの周波数帯域と3,000～6,000Hzの2つの不連続帯域を合わせた音を聞いても、何ら問題なく話された意味内容を捉えることができる。この不連続性の特性は音の知覚に限られたものではなく、言語構造の様々な処理に用いられている。例えば文の処理においても、文の構成要素をすべて意味理解に用いているわけではなく、話し言葉においては、たとえ不連続な情報提示であっても、部分から全体を再構築化し、元の意味内容を解釈可能である。ひとつの単語であっても、イントネーション、身振り、顔の表情を巧みに使い分けて、文に等しい意味内容を伝達することが可能で、日常の言語活動の中で完全な文を使うことの方が、ある意味不自然とも言える。ヴェルボトナル法が外国語学習の初期段階で、不完全な文を有効に活用するのは、この考え方の延長線上にある。そしてこれは、グベリナが博士論文の中で主張した、パロールには「話し言葉の価値体系」が必須不可欠であるという考えにも通じている。

(f) 研究の影響

応用言語学の中に第二言語習得理論が確立した80年代以降、多くの習得仮説や言語学習モデルが、行動主義心理学のアンチテーゼとして登場したことが知られている。現在は言語学と心理学両サイドからの習得理論の検討が活況を呈しているが、具体的な教授法の提案という意味では寂しい時代とも言える。80年代以降、SGAV教材の作成は行われず、教授法としての進歩は止まってしまったようにも思えるが、ヴェルボトナル法の発音矯正は今でも有効な方法論であると認識されており、それに匹敵する具体的な発音教育法の提案は他になされていない。第2言語の音声

習得理論への関心が高まっており、それらの研究成果を取り込んだより説得力のある教授法の提案が、恐らくヴェルボトナル法に課された今後の課題ではないかと考えられる。

(g) 学習者中心の改革

リチャーズ&ロジャーズ(2007)によると、教育学の分野では、学習者を中心に置く教育観が約10年周期で現れると言う(p. 312)。言語教授法においても例外ではなく、例えば、50年代に大きな影響力を持っていたオーディオリンガル・メソッド(Audiolingual Method)は、60年代に入るとその指導原理が学習者中心でないことを理由に、批判の聲が高まる。この教授法は、戦後隆盛を誇っていた行動主義の学習理論に基づいたもので、学習者に機械的な習慣形成を促すことに力点が置かれ、自発的なやりとりも考慮されず、指導者が学習の方向性を決め、発話の管理と矯正を行う、いわゆる教師主導の教授法であった。チョムスキーによる構造主義、行動主義批判の矛先がこの教授法に向けられたことも、オーディオリンガル・メソッドの衰退に拍車をかけることになった。第2言語習得理論を基盤とするコミュニカティブ言語教授法やナチュラル・アプローチ(Natural Approach)などの新しい教授法が登場するまで、オーディオリンガル・メソッドは「改造、刷新、実験、そして混迷」(p. 89)をその後続けることになる。

学習者中心主義という点に関して、それではSGAVに対して、どのような評価が下されているのだろうか。ここでは2名の研究者の意見を紹介する。まずアール・ステヴィック(Stevick, 1976)は、クレディフは絵や音声を用いて実際の場面で使われる語彙や表現を学習し、その状況を実演させるまでは行うが、学習者の関心や思いを表現させるまでに及んでいない点を批判し、その意味でクレディフの言語活動は閉じられたものであり、学習者が主体となる教授法ではないと評価を下している。ドナルド・キラリー(Kiraly & Signer, 2017)は、SGAVの英語教師養成コースに参加した経験を元に、ステヴィックと同様の意見を吐露しており、教材の提示順番が厳密に定められており、自由度がないこと、学習した内容から更に一步踏み出す応用面に欠けることがSGAVの欠点であると述べている。キラリーは、教師養成コースで1962年作成の*English by the audio-visual Method* (R. Z. Filipovic et al.)と70年代に作成された*All's Well 1 & II* (A. Dickinson et al.)の2つの教材の訓練を同じ年(1977年)に受けた経験から、後者が明らかに時代の動きを反映し、学習者中心の指導、自律学習、内容の本物らしさ(authenticity)を反映させる努力の跡を見せているが、十分なものではなかったと当時を回顧し述べている。その理由としては、恐らく第1次の教材が50年代の行動主義の影響を少なからず受け、第2次においても、そこからの脱却が果たせなかった証拠ではないかという別な研究者の意見を紹介している(p. 37)。この2つの教材作成には13年間の開きがあるが、10年周期の学習者中心主義への回帰とある程度合致していることは興味深い。

(h) 教育界の動きとの交差

今後日本においては、小学校における英語の教科化に呼応して、早期英語教育への環境整備や指導法の開発が加速化するのではないかと思われる。ヨーロッパで作成されたSGAV教材は、他

の教授法の台頭もあって、そして何よりも教材そのものの作成が80年代以降は止まってしまった為に、古いものとなってしまったが、ヴェルボトナル法の言語教育の手法は、小学校や幼稚園などの早期英語教育に今後十分に生かせるものと思われる。最近日本で制作、出版されたロベルジュ・小川・河野(2010)は、「ママのメソッド」として知られるが、その背後にはヴェルボトナル法の精神が生かされている。

(i) 他分野との交差

他分野との交流という面を考えた時に、数多くの言語教授法の中で、ヴェルボトナル法ほど科学の諸分野と接点を持つ方法論は、他にない。それはグベリナの豊かな発想の元に、人間の話し言葉に関連する学際的な研究を志向していたからである。ヴェルボトナル法は、外国語教育とは別に聴覚障害児教育という医学との接点を避けては通れない領域を扱うことも、その原動力となっている。外国語を話す際の身体運動、外国語音の聴き取り訓練にも用いられる音響フィルター機器など、他の教授法とは明らかに異なる、ユニークな訓練方法が導入されて来た。本稿の最初でも指摘したことであるが、今後ヴェルボトナル法そのものの評価は再び高まるものと期待できる。例えばマルチモーダルな情報が音声教育に有効であるなど、言語音声等の応用研究に新しい視座を与えており、グベリナが残した多くの提案が今後科学的に検証されることが望まれる。音の聞き取りも究極は脳の問題であり、聴覚器官はひとつの通路に過ぎないという主張も、限りない人間の可能性を信じたグベリナならではの発言であり、脳科学からの解明が待たれる。

4. おわりに

リチャーズ&ロジャーズ(2007)は、過去30余年に実践されてきた主な教授法を9つ、更には現在大きな影響力を持つコミュニカティブ・アプローチを5種取り上げて、それらの詳細な解説を行っている。残念ながら本稿で取り上げたヴェルボトナル法やSGAVへの言及は一切無い。その理由を推測するならば、(1) 同書が英語圏で出版された教授法の概説書である為、言語教授法＝英語教授法であり、フランス語教授法として生まれたSGAVは最初から視野に入らない、(2) SGAVが80年代以降その教材作成を行っておらず、ある意味フランス語圏以外では、その影響力は小さい、(3) ヴェルボトナル法は、元々が聴覚障害児の教育や聴力測定分野を始原としており、外国語教授法というよりは、リハビリの方法論として認識され易い¹²⁾、(4) ヴェルボトナル法は、発音矯正や音声指導の手法であり、言語教授法のひとつとして見なし辛い、などが考えられる。著名な応用言語学者による教授法の総括の中に入らないのであるから、日本の英語教育関係者にその名前が届くことは容易ではない。また仮に知名度が上がったとしても、ヴェルボトナル法自身が持つある種の「分かりにくさ」や「科学的根拠のなさ」をイメージさせる方法論上の特異性が、この方法論の広がり、つまり本稿で言うところの受容性を下げる原因にもなり得る。例えば、(1) 発音と身体運動や緊張性をどう結びつけるのか、その分かりづらさ、(2) 発音の誤りに対して調音点を示すなどの明示的な指導を行わず、体の動きなどによって矯正へ介入する教

師側に求められる力量、(3) 電子フィルターによる聴き取りの誘導、など敷居の高さを感じられるに違いない。学習者の発音上のエラーを聴覚的に細かく察知し、更に発音矯正へ介入する力は、母語話者か高度な語学力を持つ者に限られると考えるのも当然である。発音が学習者ひとりひとりの問題であるならば、個人対応を取らざるを得ず、日本のような多人数のクラス編成では、英語の発音矯正へ取り組むこと自体を最初から諦めることも致し方ない。ヴェルボトナル法の受容性に関しては、多くの問題が横たわっており、今後このような状況が好転する可能性は低い。しかし、それでもグベリナの言語教育に対する精神性が日本にも根付くことを願う者として、まとめとしてヴェルボトナル法の存在価値について簡単に述べたい。

まずは川口(2008)も述べているように、これまで多くの言語教授法が提唱されてきたが、具体的な発音指導法を明確に示し得たのは、ヴェルボトナル法とミンガン大学のフリーズ達が提唱したオーラル・アプローチによる「パターン・プラクティス」(pattern practice)のみである。このことは、音声指導が軽視されてきた証拠であり、そのものの難しさを物語っている。ここで詳細に立ち入ることはできないが、パターン・プラクティスによる発音指導とヴェルボトナル法の発音指導を比較すれば、どれほど後者が学習者の立場に立ち、発音能力を最大限に引き出そうと考えられたものであるかが理解できると思う。

最後にこの稿のまとめとして、最近話題となる「国際英語論」に関連して触れてみたい。この方面の主導者であるジェニファー・ジェンキンス(Jennifer Jenkins)は、非母語話者同士の英語コミュニケーションに欠かすことのできない、中核部を構成する英語音声体系をリング・フランカ・コア(Lingua Franca Core)と呼んでいる(Jenkins, 2000)。これまで英語音声習得の目標とされた母語話者の英語音声体系と異なり、音のレパートリーも絞り込まれたために変則的な英語と捉えられ、伝統的な音声指導を信奉する研究者などから辛辣な批判を受けることになった(例えば, Szpyra-Kozłowska, 2015)。ヴェルボトナル法の観点から見ても、プロソディ軽視の立場は方向的にも真逆であり、音声指導の立場からは与することはできないように思われる。しかしながら、これまでの母語話者の英語を究極の目標とするこれまでの、ある意味「完璧主義」を志向する英語教育を、今後の非母語英語話者の数が指数的に増大する国際英語の時代に相応しい形に変えて行こうとするジェンキンスたちの企ては、根底ではグベリナの考えに近いのではないかと考えられる。なぜなら、グベリナの発音矯正は決して完璧主義を求めるものではないからである。聴覚障害児は、言葉が完全でなければ口頭によるコミュニケーションを諦めるのかという問いに対して、グベリナの答えはNoである。残存聴力を生かし、あくまで人間の潜在的な可能性を求め、できる限り引き上げることがグベリナの目標であったからである。言葉は千変万化、状況によって変化すること、それに対して状況に応じた最適性を追求することがヴェルボトナル法の精神であり、この最適性が意味するところは、「良い加減さ」(いい加減さではなく)を求めることであり、さじを投げることではなかった。SGAVにおいても、アフリカから渡ってきた多くの人々を安直に、労働者として仕立てるための語学教育ではなく、グベリナはその先の精神的豊かさの獲得を語学教育の目標としていたことが知られている。ジェンキンスの国際英語に対する姿勢の裏には、グベリナに共通する言語使用における寛容さやおおらかさがあるのではないかと、昨今の国

際英語論争などを見聞するにつれて、そのように思われて仕方がない。

注

- 1) SGAVは、クレディフ (CREDIF) という名前で呼ばれることもあり、東京・お茶の水にあるアテネ・フランセでは、長年クレディフ方式を用いたフランス語のコースが開講されている。日本語教育の分野では、拓殖大学大学院言語教育研究科や早稲田大学大学院日本語教育研究科にてヴェルボトナル法についての授業や実習が実施されている。
- 2) クロード・ロベルジュ (Claude Roberge) の編集によりフランス語で *Rétrospection* (回顧) がクロアチアで出版されたのを契機に、同書はスペイン語、クロアチア語、英語、日本語に翻訳出版された。
- 3) 例えば2009年より北米にて *Pronunciation in Second Language Learning and Teaching* 会議が毎年開催されており、専門誌としては *Journal of Second Language Pronunciation* (John Benjamins) が2015年に発刊された。
- 4) Petar Guberina (1939), *Valeur logique et valeur stylistique des propositions complexes: Théorie générale et application au français* (複文の論理的価値と文体論的価値—一般理論とフランス語への適用—)
- 5) スヴァグポリクリニカで訓練を受ける聴覚や言語に障害をもつ子供たちは、幼少時から施設内にて個別そしてグループでの徹底した訓練を受けながら、学校に通うケースが多く、ヴェルボトナル法という教授法による効果だけでなく、教育システム全体が有機的に機能することによって、子供たちの普通学校 (通常学級) へのインテグレーション率が引き上げられているのだと推察される。クロアチアでは今でも、共産主義の名残りで学校教育が2部制 (午後2時を境に、午前中に学校に通うグループと午後からのグループ) で運営されており、このことが施設での訓練と教育の両立を可能にしている。またポリクリニカでは、ザグレブから遠くに住む子供たちの為に、親代わりをする一般家庭も用意されている。ポリクリニカ (総合病院) という名称から想像しづらいが、機関内にはSGAVに基づく外国語教育部門も置かれ、子供から老人まで多くのザグレブ市民が、昼間、夜間の語学講座を受講している。
- 6) グベリナ逝去直後 (2005) にスヴァグポリクリニカを訪問した際、現地で得た情報による。
- 7) 露出した脳と呼ばれる人間の皮膚が、音を捉えることができることを多くの研究者が報告している (山口2010; 傳田2013)。また、グベリナの見聞性を物語るもう一つの例としては、言語が身体性や空間認知と強く結びついているという初期からの主張を挙げることができる。従って、言語を人間の認知機能の立場から分析を行っている認知言語学の研究者がヴェルボトナル法の文献を覗くならば、空間と言語認識の関係性など、共通性を感じる部分が多いのではないかと考えられる。
- 8) 外国語の学習も聴覚障害児の言葉の訓練も、グベリナが唱えるヴェルボトナル法に基づいて訓練方法が組み立てられる。つまり、ことばの産出は身体の緊張性に深く関わっていること、プロソディと身体の動きは深く関連すること、各語音の特性は発話のプロソディに影響を受けること、マルチモーダルな情報が音声教育には重要であること等、すべてヴェルボトナル法の共通原理から成立している。
SGAVの根本的な原理は、グベリナのヴェルボトナル法から出たものであり、それがクレディフでの *Voix et Images de France* の作成の際に教授法の屋台骨を支えたというのが正しい理解であると考えられる。つまりSGAVによる言語教育観がCREDIFの指導法と完全に一致する訳ではない。
- 9) スヴァグポリクリニカの外国語教育部門長である prof. Dunja Frankol からの教示。尚、SGAVの教材作成は80年代に入ってからは、ほとんどなされていない。そういう事情もあって、視聴覚教材を現在使用する場合、映写機を使ってスクリーン上に映し出される絵 (ストーリーの場面展開を示す静止画像) は、当時の時代状況を反映したものであり、時代遅れの古臭いイメージを学習者に想起させる可能性がある。SGAVの教材は

*Voix et Images de France*以降、フランス語以外の多くの言語に関して完成されたが、実質的な作業はグベリナの主導の下に、ザグレブのメンバーによってなされたものである。そのことによって当初、サン・クルー全体構造視聴覚方式 (La méthode audio-visuelle structuro-globale de Saint-Cloud) と呼ばれることもあった名称から、パリの高等師範学校の所在地名、サン・クルーが外されてしまう。つまり、それ以降のSGAVの発展はグベリナの下で行われたものである。

- 10) 障害児教育における手話導入に関しては、瓜生 (2012) が詳しい。
- 11) グベリナやリヴァンクたちが*Voix et Images de France*の作成に着手した50年代は、テープレコーダーやプロジェクターが最新機器として登場したばかりの頃で、視聴覚教材作成にとって好都合な時期であったことは間違いない。その意味ではSGAVもテクノロジーの進歩に影響を受けた教授法であると言えるかもしれない。
- 12) 従来の純音聴力検査と語音聴力検査の中間に位置する新しい検査法をグベリナが考案し、それを音の高さ (tonal) だけでなく、言葉 (verbo) の聴き取り能力を調べる方法であることを強調するため、この語を合体させて、ヴェルボトナル聴力検査法 (verbo-tonal audiometry) と呼んだ。そしてこれが、ヴェルボトナル法という名前の由来となった。

参考文献

- 瓜生淑子 (2012) 「実践段階に入った聴覚障害児教育における手話の早期導入」, 『奈良教育大学紀要』第61巻, 第1号, pp. 57-67
- 川口順一 (2007) 「VT (ヴェルボトナル) 法による日本語音声指導」戸田貴子 (編) 『日本語教育と音声』東京: くろしお出版
- グベリナ, ベタル (1993) 『全体構造視聴覚方式 (サンクルー・ザグレブ方式) の理論的基礎—パロールの言語学—』 (言調聴覚論研究シリーズ第20巻), 上智大学聴覚言語障害研究センター
- グベリナ, ベタル (著) クロード・ロベルジュ (編) (2007) 『ことばと人間—聴覚リハビリと外国語教育のための言語理論』東京: 上智大学出版会
- 小坪博子他編 (2002) 『聴覚・言語障害教育および外国語教育のためのVTS入門』, グベリナ記念ヴェルボトナル普及協会
- 傳田光洋 (2013) 『皮膚感覚と人間のこころ』東京: 新潮社
- 町田章一他編 (1994) 『言調聴覚論の輪郭』, 上智大学聴覚言語障害研究センター
- 山口創 (2010) 『皮膚という脳』東京: 東京書籍
- リチャーズ, J. C. & ロジャーズ, T. S. (著) アンソニー・アルジェイミー & 高見澤孟 (訳) (2007) 『アプローチ & メソッド 世界の言語 教授・指導法』東京: 東京書籍
- ルナール, R. & ロベルジュ, C. (著) 齊藤征雄 (訳) (1983) 『SGAV方式による外国語教授法』, 上智大学国際言語情報研究所
- ロベルジュ, クロード・小川裕花・河野万里子 (2010) 『ロベ先生とはじめてのえいご』東京: 小峰書店
- Guberina, P. (2013) *The Verbotonal Method*. Ed. by Claude Roberge. Zagreb: AR TRESOR NAKLADA.
- Howatt, A. P. R. (1984) *A History of English Language Teaching*. London: Oxford University Press.
- Jenkins, J. (2000) *The Phonology of English as an International Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Jenkins, J. (2005) Misinterpretation, Bias and Resistance to Change: The Case of the Lingua Franca Core. In K. Dziubalska-Kolaczyk & J. Przedlacka (Eds.), *English Pronunciation Models: A Changing Scene* Berlin: Peter Lang..
- Jenkins, J. (2007) *English as a Lingua Franca: Attitude and Identity*. Oxford: Oxford University Press.

- Kiraly, D. & Signer, S. (2017) *Scaffolded Language Emergence in the Classroom: From Theory to Practice*. Berlin: Frank & Timme.
- Stevick, E. W. (1976) *Memory, Meaning and Method: Some Psychological Perspectives on Language Learning*. Rawley, MA: Newbury House Publishers.
- Szpyra-Kozłowska, J. (2015) *Pronunciation in EFL Instruction: A Research-Based Approach*. Bristol: Multilingual Matters.